

# 静寂・沈黙を表すオノマトペ ——和語系・漢語系オノマトペの関わりから——

中 里 理 子\*

(平成16年10月29日受付；平成16年12月7日受理)

## 要 旨

静寂を表す「しんと」「しんしん」「ひっそり」、沈黙を表す「むっつり」「黙然」を取り上げ、和語系オノマトペと漢語系オノマトペの関わりという点から考察した。まず、オノマトペを音象徴と考えたとき、無音状態の静寂・沈黙を表すオノマトペがどのように成立したのかを考え、「しんしん」「しんと」が漢語に由来する語であること、「ひっそり」が一般語彙「ひそか・ひそむ」との関連でできた語であること、「むっつり」が表情を表す擬態語であること、「黙然」が漢語系オノマトペであることを確認した。次に、近世、近代から拾った用例を基に、「しんと」「しんしん」「ひっそり」の意味領域と、「むっつり」「黙然」の関わりについて考察した。「しんしん」は意味領域を限定する方向に向かい、「しんと」と「ひっそり」は物音に焦点を当てるか、人の気配に焦点を当てるかという相違点があることによって併存してきた。「黙然」は明治中期まで広く使われていたが、沈黙だけでなく性質や態度までを表す「むっつり」が次第に一般的になっていく様相が見て取れた。これらの具体例から、漢語系オノマトペは日本語のオノマトペに組み入れられるものと漢語として用法が限られていくものとに分かれることを見た。

## KEY WORDS

Onomatopoeia of Japanese origin 和語系オノマトペ  
Onomatopoeia of Chinese origin 漢語系オノマトペ  
Quietness 静寂 Silence 沈黙  
Origin of Onomatopoeic Words オノマトペとなる語の由来

## 1 静寂・沈黙を表すオノマトペの由来

### 1.1 オノマトペの言語音と意味の関係

オノマトペは「言語音と意味の間に有縁的な関係がある」とされる語群であり、その言語音と意味内容の関わりは「模写」の関係にある、すなわち自然界に起きる様々な音・声・状態を言語音で模写した語と定義されている<sup>(1)</sup>。オノマトペはいわゆる擬音語と擬態語に大別され、その区別は簡単にはつけないが、「擬音語は外界の物音や人間・動物の声を表し、擬態語は外界の様子や心情を表す」という違いがあるとされる<sup>(2)</sup>。

以上の定義を念頭に置きながら、「静寂」を表すオノマトペの存在について考えてみたい。まず「静寂」の対立概念である「騒音」を表すオノマトペを考えてみると、「騒音」となる音をも

\* 言語系教育講座

とにした擬音語としてのオノマトペがいくつも存在する。『類語大辞典』の「0412 やかましい」の項を見ると、その中に「ざわざわ」「がやがや」「どやどや」「わあわあ」「わいわい」「わっと」「きゃあきゃあ」「ぎゃあぎゃあ」「きゃっきゃ」「ががああ」というオノマトペが記載されているが、いずれも人声をもとにした騒がしい音を模写した擬音語のオノマトペである。一方、静寂を表すオノマトペを同辞典の「0413 静まる」の項で見ると、「しんと」「ひっそり」「ひっそりかん」というオノマトペが記載されている。これらは「物音がない」状態を表しているもので、音の模写である擬音語のオノマトペであるとはすぐには考えにくい。そこで擬音語ではなく擬態語であると考えた場合、「外界の様子」すなわち「静寂の状態」が模写されることになるが、「静寂」の意味特徴が「物音がない」という聴覚的なものなので、擬音語であることを退けて「物音がない状態」を表していると想定することは難しい。物音がないということは音を立てるような動きがないということになるだろうか。動きがない状態を表すオノマトペは、先の『類語大辞典』を見ると、「4800 とまる」の項に「びたりと」「びたつと」「ばたりと」「ばたつと」「ぱったり」「ぶつつり」「ふつつり」が、「4803 とどまる」の項に「じつと」「じいつと」というオノマトペが記載されている。擬態語は感覚・感情を表す擬情語と言われるものを除いては、ほとんどが何らかの行為や動きを表すものであるが、「とまる」を表す「びたりと」以下のオノマトペは、「動いていたもの・続いていたもの」が「急に止まる」様子を表しており、そこには「止まる」という一種の動きがあると考えられる。「とどまる」に挙げられていた「じつと」「じいつと」に関しては、静止そのものを表しているが、静寂を表す「しんと」「ひっそり」をこの二語と同様に捉えて、「動きがないために物音がしない状態」を表す擬態語であると解釈することには無理があるだろう。

## 1.2 静寂を表すオノマトペの由来

「しんと」「ひっそり」が聴覚的印象を表すオノマトペであるにもかかわらず「音」に基づいてできたオノマトペとは考えにくいとしたら、どのようにして生まれたオノマトペなのだろうか。

オノマトペの言語音の成立には大きく見て二種類あると考えてよいだろう。一つは「様々な音・声・状態を言語音で模写した」もので、「トントン」というノックの音や、「ニャー」という鳴き声、「スラスラ」というなめらかな状態を表すものなど、本来のオノマトペの定義に沿ったものである。もう一つは純粹にオノマトペとして成立したというより、日本語の語彙体系の中で従来語の音との関連によって作られたものである。たとえば、「ヒタヒタ>浸る」「ウキウキ>浮く・浮かれる」「ウネウネ>畝」などのオノマトペがそれに当たる<sup>(3)</sup>。

後者に近いものには「ユラユラ>揺れる」「ネバネバ>粘る」など、もともとオノマトペ(「ユラ」「ネバ」)が元となってそこから派生して語ができたものがある<sup>(4)</sup>。この場合は、オノマトペから生まれた一般語彙(揺れる・粘る)からさらに、語の音との関連によって再びオノマトペの型に当てはまるオノマトペ(ユラユラ・ネバネバ)が生まれたと考えられる。ここで取り上げる静寂のオノマトペのうち、「ひっそり」がこれに当てはまる。「ひっそり」は「ひそかに」という語と関連するが、『時代別国語大辞典 上代編』の「ひそかに」の項に「ヒソは次項ヒソムの語幹でもあり、元來擬声語か」と記されており、もともとが「ひそ」というオノマトペから派生した語であることがうかがわれる。その「ひそかに」から再び「ひそと」「ひそひそ」というオノマトペが生まれ、オノマトペの語形変化として「ひっそり」が生まれた。「ひっそり」

は古くは擬音語（あるいは擬態語）だったものであるが、語源から離れて一般語との関連でできたオノマトペと考えるとよいのではないだろうか。

次に「しんと」について考えてみたい。「しんと」が登場するのは江戸時代とやや時代が下がっている<sup>(5)</sup>。しかも、手に入る文献を一通り見ても、「ひっそり」に比べてほとんど用例が見られない。「しんと」に類似した形で多く見られるのは「しんしんと」である。「人絶えて物しんしんたる寺町を（「心中宵庚申」）」などの例がいくつかある。「しんしんと」のほうが多く用いられており、使われ方も「しんと」に近いことから、「しんと」はあるいは「しんしんと」の短縮形ではないか推測される。日本語のオノマトペの多くは「しんしんと」のように「ABABと」という反復形になることから、漢語の「森々」「深々」が日本語のオノマトペと同様に捉えられ、その連想から「しんと」というオノマトペが生まれたのではないだろうか。明治期の用例のいくつかは「森と」という漢字が当ててあり、「しんと」は「森々と」とともに「森閑と」など漢語のオノマトペからの連想でできた語ではないかと思われる。先に見た「ひっそり」に「ひっそりかん」という派生形があるが、これは「しんと」と「森閑と」との関係からの類推でできたものと思われる<sup>(6)</sup>。「ひっそり」「しんと」はともに音象徴<sup>(7)</sup>としてのオノマトペではなく、「ひっそり」は和語との関連から、「しんと」は漢語との関連からできたオノマトペと考えられる。

### 1.3 沈黙を表すオノマトペの由来

「物音がない」状態を人間の場合に当てはめると「沈黙」になるが、沈黙を表すオノマトペも、静寂の場合と同様に音声から生まれる擬音語とは考えにくい。従って「沈黙している状態」を表す擬態語として生まれたか、あるいは静寂を表すオノマトペと同様に一般語彙との関連で生まれたか、のいずれかになる。

『類語大辞典』「2902 黙る」の項に挙げてあるオノマトペは「むっつり」「むつつと」「むすつと」「むつと」「ぶすつと」である。いずれも黙っているときの表情を「模写」したものと考えられる。さきの静寂を表すオノマトペとは異なり、人間に関わる事柄なので、擬態語としてオノマトペが作られやすかったのだろう。ただし、江戸期にはほとんど用例が見られず、沈黙の状態は「黙然（もくねん）」で表される例がいくつか見られた。「むっつり」が和語系オノマトペであるのに対し、「黙然」は漢語系オノマトペ<sup>(8)</sup>である。

次節以下は、静寂と沈黙のそれぞれの場合について、近世から近代にかけてどのようにオノマトペが用いられていたかを見ていく。いずれの場合も和語系・漢語系の両面に関わってオノマトペが見られるため、具体例の検討を通して近代のオノマトペにおける和語系・漢語系オノマトペの関わりについて見ていきたい。

## 2 近世・近代における静寂を表すオノマトペ

用例の調査に当たっては、近世は国文学研究資料館のホームページにある古典文学データベースの作品及び洒落本『花暦八笑人・滑稽和合人・妙竹林話七偏人』（有朋堂文庫）から、近代は新潮社 CD-ROM『明治の文豪』『大正の文豪』の作品及び『明治文学全集』（講談社）所収の22作品、『筑摩現代文学大系』（筑摩書房）所収の2作品<sup>(9)</sup>から収集した。次節の沈黙を表すオノマトペに関しても同様である。

## 2.1 近世の場合

### 2.1.1 「しんと」「しんしん」

まず「しんと<sup>(10)</sup>」についてであるが、近世で調査した作品には「しんと」の用例は1例、「しんしんと」の形が15例見られた。

- ① そうするとそれ迄何か高笑をして居ても、しんとなつてコソへ嘶ヨ。 (「八笑人」)
- ② 夜もしんへと更けわたりました。 (「七偏人」)
- ③ 人絶えて物しんへたる寺町を (「心中宵庚申」)
- ④ 只森々としづまりて人の影勢も有らざれば、 (「七偏人」)
- ⑤ 追風もてくる鐘のこゑいとしん。しんと聞へける。 (「伊賀越道中双六」)

例①に見るように、「しんと」は現代と同じく物音のない静かな様子を表している。それに対し「しんしんと」は、現代よりも用法が広いようである。『現代擬音語擬態語用法辞典』「しんしん」の項に「静寂である様子」を表す場合は「用法が非常に限定されていて、ふつう雪が降る場合や夜が更ける場合について用いられる」と解説されるように、現代では限られた場合に用いられる。近世でも例②のような「夜が更ける」様子を表す例が多いのだが、それ以外にも、例③④のように辺りが静かな様子や、例⑤のように辺りの静けさを強調する物音を表すものがある。

『日葡辞書』<sup>(11)</sup>を見ると、「しんと」はないが「しんしんとして (Xinxinto xite)」の項があり、「ただひとりだまって静かにしていること。例, Xinxinto xite iru. (深々として居る) Xinxinto xita tocoro (深々とした所) 静かでもの寂しい所」と書かれている。「しんしんと」は「しんと」以前に静寂を表すオノマトペとして広く使われていた語ではないかと思われる。

### 2.1.2 「ひっそり」

次に「ひっそり」を見てみると、「ひっそり」の形は4例、「ひっそ」の形が13例、「ひそひそ」の形が27例見られた。

- ⑥ 残りの人は内に入り、雨戸をしめてひっそりとひそみかへつて音もなし。 (「和合人」)
- ⑦ やうへ人心地はつきたれども、腹合甚だよろしからず、船中ひっそとしてありけるが (「八笑人」)
- ⑧ 耳を壁に押當てて。聞けどひっそと音もせず (「山崎與次兵衛壽の門松」)
- ⑨ いづれも大事の詮議なれば座中ひっそとしづまりける (「頼光跡目論」)
- ⑩ 人々興ザメテ、ヒソへトナリケル、 (「槐記」)

「ひっそ」の形は例⑧⑨のように浄瑠璃作品に多く見られた。また「ひっそり」は現代では「物音や人の気配がなく、さびしく静かな様子」と「目立たないように静かに行動する様子」の二つの意味があるが<sup>(12)</sup>、「ひっそ」の場合、例⑧⑨が前者の意味、例⑦が後者の意味に該当する。「ひっそり」の形では後者の用例はみつからず、すべて辺りが静寂な様子を表す例であった。「ひそひそ」は現代では専ら「小さな声で話す様子」を表し、近世の例でもほとんどが「ひそひそ言ふ」「ひそひそ話」「ひそひそ声」のように使われているが、例⑩の場合はそれとは異なる

り「ひっそり」に近い使われ方をしている。『暮らしのことば 擬音語擬態語辞典』『ひそひそ』の項では『玉塵抄』の例を挙げ、「古くは現代語の『ひっそり』のように、目立たず静かにしている様子を表すこともあった」と解説しているが、近世にもその使用例が見られた。「ひっそり（ひっそ）」は、もともとは「ひそか」「ひそむ」から「ひそひそ」というオノマトペが再度派生し、さらに「ひそひそ」の変形として生まれたのではないと思われる。「ひっそり・ひっそ」が表れてからは、「ひそひそ」の意味が「小声で話す様子」に限定されていったのだろう。人に見つからないようにする様子、息を潜めて静かにする様子という「密か」「潜む」の意味特徴が、「ひそひそ」と「ひっそり」で分け合いながら関連している。その意味領域の分け方について今回は見ることはできないが、「ひそひそ」の類義語「こそこそ」が派生形「こっそり」とほぼ同じ意味を表しているのとは対照的である。なお、『日葡辞書』には「ひそめく」の項はあるが「ひっそり」「ひっそ」「ひそひそ」の項はない。

## 2.2 近代の場合

### 2.2.1 「しんと」「しんしん」

近代になると「しんと」の用例も増えており、「しんしんと」よりはるかに多くなっている。漢字を当ててある例も多く、調査範囲内で10種類の当て字が見られた。

- ⑪ 宛然きながら木立がその下へ匿れ込んでいる小径へ人を呼ぶようで、とんと寂寥しんとして木下閣へ招くようで。 (「めぐりあい」)
- ⑫ 「魔が魅したようだ」と甘谷が呆れて呟く、……と寂然しんと成る。寂寞しんと成ると、笑ばかりが、「ちゃはははは、う、はは、 (「売色鴨南蛮」)
- ⑬ 唯土でも掘り起すらしい音が聞寂しんとした空気にひびけて伝わってきていた。(「新生」)
- ⑭ 遽かに箭寂しんとした家の内の空気は余計に捨吉の心をいらいらさせた。 (「桜の実の熟するとき」)
- ⑮ 暫時、三人は無言になった。天も地も箭しんとして、声が無かった。 (「破戒」)
- ⑯ 言ふ聲ハ沈しんと響いて聲の絶えるや否や引きつづいて中に寂寞しんが耳に打つ計り
- ⑰ 昼間からあまり車の音を聞かない町内は、宵の口から寂しんとしていた。 (「門」)
- ⑱ 森しんとした林の上をパラパラと時雨て来る、 (「牛肉と馬鈴薯」)
- ⑲ 内の中は森しんとしている。 (「戯作三昧」)
- ⑳ 四面聲なく、沈々しんとした趣むき、 (「小公子」)

多くは「しんと」とひらがな表記されているが、例⑪～⑳までのような当て字も見られた。この中で例⑱⑲に2例挙げたように「森と」は他の当て字に比べて多くの作家・作品中に使われていた。当て字が多く用いられていた明治期の作品だけでなく、大正期の作品にもいくつか見られた。また、「寂と」「寂然と」「寂寞と」も複数の作家・複数の作品に見られた。漢字の当て方は、「寂然と」のように意味の対応する漢語を当てたものが何種類かあるが、用例数が多かったのは「森と」「沈と」「沈々」という音の関連による当て字である。1節で見たように、「しんと」は「森々」「深々」「沈々」といった漢語との関連でできた語であり、その意識が使用者の側にもまだ残っているのではないだろうか。「森々」など漢語との関連の強さを見るために、「しんしん」の例を見てみたい。

- ⑲ 一面の杉の立樹だ、<sup>しんしん</sup>森々としたものさ。 (「婦系図」)
- ⑳ 一本一本の木が犯し難い威厳をあらわして来、しんしんと立ち並び、立ち静まって来るのである。 (「冬の蠅」)
- ㉑ 大都市の夜はいま沈々としてふけわたった。 (「多情仏心」)
- ㉒ 只しんへとして恐ろしい静かな夜である。 (「開業醫」)
- ㉓ 木枯らしのはたと吹き息んで、しんしんと降る雪の夜の如く静かになった。 (「吾輩は猫である」)
- ㉔ 夜の温度のしんしんと降下しつつあるのを感じた。 (「土」)

漢語としての「森々」は木々が生い茂る・立ち並ぶ様子や静寂を、「沈々」は夜が更けていく様子や静寂を表すが、近代ではひらがな表記でオノマトペ「しんしん」としてもこれらの意味で用いられている。「深々」という漢語はもともと静寂を表すが国訓として夜の更ける様子、寒さの身にしみる様子を表す<sup>(13)</sup>。例⑲～㉔がこれに当たり、現在の「しんしん」というオノマトペはこの意味で定着している。いずれの漢語も「静寂」を表す意味を持つことと関連し、近世の例でも見たように、近代でも「しんと」と同様に「静寂」を表す使われ方をしているものがあつた。「しんと」の例と対応させて例を挙げる。

- ㉕ 世間は<sup>しんしん</sup>深々として物淋しく悲しさうな小児の泣聲が遠い隣から幽かに聞える。 (「薄命のすゞ子」)
- ㉖ 夜に入つてから雨がしよぼへとして降出して、世間も<sup>しん</sup>森として来た。 (「薄命のすゞ子」)
- ㉗ <sup>しんしん</sup>森々として陰気な<sup>うち</sup>宅であつたのが、 (「雲のゆくへ」)
- ㉘ 邸内が遽に<sup>しん</sup>森として来る。 (「雲のゆくへ」)
- ㉙ しんしんと底も知らず澄み切つた心が唯一つぎりぎりとして死の方に働いて行つた。 (「或る女」)
- ㉚ 君の心は妙にしんと底冷えがしたように刺々しく澄みきつて (「生まれ出づる悩み」)

例⑲⑳、㉙㉚は辺り一帯や家の中が静まりかえっている様子を、㉛㉜は静かに澄み切つた様子を、いずれも「しんしん」「しんと」で同様に表現している。明治19年刊『和英語林集成第三版』には「しんしんと」の項はあるが「しんと」の項はなく、「しんしんとしたところ」という例があることから、明治20年頃まで「しんしんと」が静寂を表す語として広く用いられていたようである。ただ用例数は多くはみつからず、大まかに言えば明治30年代頃から「しんしん」「しんと」の意味領域が明確になつたのではないかとまた思われる。「しんと」が「しんしん」との関連であることをさらに見るために「森々」と類義表現である「森閑」の例を見てみたい。

- ㉛ 四辺は<sup>しんかん</sup>森閑として人の住んでいる臭さえしなかつた。 (「彼岸過ぎまで」)
- ㉜ 急にそこいらが<sup>しんかん</sup>閑寂として来た。 (「家」)
- ㉝ 漁村の雨の日は晝ながら<sup>しんかん</sup>静閑として、人なきかと思はるゝのであつた。 (「黒潮」)
- ㉞ 相変らず家の内は<sup>しんかん</sup>シンカンとしていた。 (「家」)

「森閑」という語は複数の作家・作品中に見られた。その使われ方は「しんしん」「しんと」とほぼ同様であり、「森閑と立つ杉の梢（「二百十日」）」のように「森々」と同じく木々が静かにそびえる様子を表す例もあった。例④⑤のように他の漢語に「しんかん」を当てたものもある。「閑寂」は「しんと」や次で見る「ひっそり」に当て字された漢語でもあり、また次節に挙げた例④⑨には「森閑」に「ひっそり」とふりがなされており、「しんかん」が「しんと」「ひっそり」と同じような感覚で使われていたことが窺われる。例⑤のように仮名書きで使われる例もあり、島崎藤村という作家の特徴とも受け取れるが、「しんかん」の音の響きに他の和語系オノマトペと同様の印象を持って使われることもあったのではないだろうか。日本語のオノマトペの型には「あたふた」「どたばた」「キンコン」のように「ABCB」型のものがあり、「しんかん」は言語音の面からもオノマトペに近い語である。「しんと」と「しんかん」の関連の強さが、先に触れたように「ひっそり」から「ひっそりかん」が派生することにつながったのだろう。

### 2.2.2 「ひっそり」

「しんと」に当てられた漢字は「ひっそり」に当てられた漢字と一部重なっている。「ひっそり（ひっそ）」には以下のように16種類の当て字が見られた。

- ③⑦ さなきだに静かな庭が一増<sup>ひっそり</sup>肅然して (「運命論者」)
- ③⑧ 會員ハ耳を聳だて。悄<sup>ひっそり</sup>然として猶高説を聞んと競ふ機を隙かさず。 (「西の洋血潮の暴風」)
- ③⑨ 須臾にして風が吹罷めば、また四辺<sup>ひっそり</sup>蕭然<sup>ひっそり</sup>となって (「浮雲」)
- ④⑩ 田口の玄関はこの間と違って蕭<sup>ひっそり</sup>条<sup>ひっそり</sup>していた。 (「彼岸過ぎまで」)
- ④⑪ <sup>ひっそり</sup>寂寥と大路を走る車も稀に按摩の笛と氷賣<sup>ひっそり</sup>る聲のみ遠く聞えたる (「巷説兒手柏」)
- ④⑫ 両側の家は、孰れも火が消えたように<sup>ひっそり</sup>寂寞して、 (「婦系図」)
- ④⑬ 家内も小人数らしく<sup>ひっそり</sup>寂然として音もしなかった。 (「行人」)
- ④⑭ 此処は横町の事とて、もう<sup>ひっそり</sup>閑寂として人一人通らぬ。 (「其面影」)
- ④⑮ <sup>ひっそり</sup>静寂と人気のなくなった時は頹<sup>ひっそり</sup>廢しつつあるその建物の何処にも生命が保たれているとは見られぬほど (「土」)
- ④⑯ それは<sup>ひっそり</sup>沈静とした、気の遠くなるような夜 (「破戒」)
- ④⑰ 看護婦が烈しく玄関の戸締まりする音が響いて、その後は<sup>ひっそり</sup>寂爾と夜が更けた。 (「或る女」)
- ④⑱ なにもかも<sup>ひっそり</sup>静寂として、沈まり返って、休息んでいるらしい (「藁草履」)
- ④⑲ 大正元年までは電車も通ってはず、真昼間といえども<sup>ひっそり</sup>森閑としていたものです。 (「市井にありて」)
- ⑤⑩ 時々雪の中を通る荷車の音が寂しく聞える位、四方は<sup>ひっそり</sup>静として、沈まり返って (「旧主人」)
- ⑤⑪ 神楽坂へかかると、<sup>ひっそり</sup>寂りとした路が左右の二階屋に挟まれて (「それから」)
- ⑤⑫ 四下は<sup>ひっそり</sup>閑として、他に何の音も響も聞えない。 (「新所帯」)

近代の用例のほとんどは「ひっそり」とひらがな表記されているが、上記のように漢語の当て字も多く見られた。なお「ひっそ」は古い形と見え、当て字のふりがなとしてしか用例がみ

つからなかった。上の当て字の中で「悄然」「寂然」「寂寞」「寂寥」「肅然」「闕寂」「寂り」は複数の作者・複数の作品に見られたものである。ただし、「しんと」の場合の「森と」のように他の当て字よりも目立って多く使用されているものはない。また、「しんと」の場合に言語音のつながりのある「森と」が多く当て字されているのに対し、「ひっそり」はすべて、意味の対応する漢語が当ててある。明治期の当て字とふりがなの関係の多くは、漢語に対して意味が対応する和語がふりがなになっているが、「ひっそり」の場合は全てがそれに該当する。これは、「しんと」が漢語由来の語であるのに対し、「ひっそり」が純粹に和語であることによるものだろう。

「ひっそり」と「しんと」の当て字を対照すると、「寂然」「寂寞」「寂寥」「闕寂」「罰寂」「罰寂」「寂」が両語に使われている。「しんと」「ひっそり（ひっそ）」と意味が対応する漢語が重なるということは、「しんと」「ひっそり」の意味もまた重なる部分が大いということになる。近世ではさらに「ひそひそ」も「ひっそり」に近い意味で使われていたが、近代では「真っ白な着物を着た女が、我が肉体の先を越して、ひそひそと、しかも規則正しく、わが心のままに動くのは恐ろしいものであった。（『永日小品』）」など数例が見られただけで、「ひそひそ」はほぼ「小さな声で話す様子」に落ち着いているようである。『和英語林集成第三版』では「ひそひそ」の形で記載されており、例に「ひそひそものをいう」が挙げられている。「ひっそりと」の項には、「ひっそりしている」「ひっそりとしたところ」の例があり、「ひそひそ」とはすでに意味の違いが明確になっているが、「しんと」「しんしんと」とは非常に近い意味を表していることが窺える。これまで挙げた用例に見るように、「しんと」も「ひっそり」も、家や建物の中、町や森や辺り一帯が静まりかえる様子を表す点で同じに使われ方をしている。

- ㊦ 窓近く、ジーッとふた声ばかり、おびえたように、短く蟬が鳴いた。そしてあたりが一層しんとした。 (「多情仏心」)
- ㊧ 品川の空の方から響けて伝わって来るその汽車の音は一層四辺をひっそりとさせた。 (「新生」)
- ㊨ そう云って彼は急にしんとした教室を見巡すと (「学生時代」)
- ㊩ 皆、一時にひっそりとなった。その中を、絶え絶えにつづく猪熊の爺の呻り声と一つになって、かすかに猫の声が聞えて来る (「地獄変」)

例㊦㊧は物音が途絶えた跡の静けさを表し、例㊨㊩は瞬間的な静けさを表す点で類義表現となっている。この二語の異なる点は、「ひっそり」は「実際に物音がないだけでなく、人間の気配がしない空虚・沈潜の暗示がある<sup>(14)</sup>」点である。静まりかえっている様子を表すのは同じであっても、「しんと」は物音がない様子に描写の焦点が置かれ、「ひっそり」は人の気配がしない様子に焦点が置かれている。例㊦はあたりの静寂を描写し、㊧は人の気配がない寂しい静寂を想起させる。例㊨は皆が一斉に沈黙して物音がしなくなる様子を、㊩は皆が息を潜め、気配が感じられなくなる様子を描写している。以下の例は「しんと」「ひっそり」が置き換えられない例である。

- ㊪ 寧ろひっそり構えているその食堂は、大して広いものではなかった。 (「明暗」)
- ㊫ 私はいるかいないか分からないほどひっそりと暮した。 (「分配」)
- ㊬ ああした湯治場のさびしくひっそりとした時に行き合わせたのも (「桃の雫」)



- ㊦ 好い講演が始まってそこでもここでも聴衆が水を打ったようにシーンとして了る時は  
 (「桜の実の熟するとき」)

例㊦～㊩は人に知られない様子を表しており、これらは「しんと」で置き換えることはできない。例㊦は「しんと」の強調形であるが、聴衆が聞き入ったり座が白けたりする場面では「しんと」が使われている例がいくつかあった。

ももとは「しんと」も、「寂寞」「寂寥」「寂然」「寂と」などの当て字が見られたように、人の気配のない寂しい静けさも表していたと考えられるが、「森々」などの漢語の表す「物音のない静けさ」を専ら意味する方向に向かったのだろう。「ひっそり」は「ひそか・ひそむ」との関連から自ずと人の気配が関わる語であり、語の由来に基づいて二語が意味領域を分けて併存してきたのではないだろうか。

### 3. 近世・近代における沈黙を表すオノマトペ

#### 3.1 近世の場合

現代語の沈黙を表すオノマトペには「むっつり」「むっと」などがあるが、1節で触れたように近世では「むっつり」の用例は見られず、「むっと」が少数例みつかっただけである。多くは「黙然(もくねん)」という漢語によって表されており、また「だんまり」というオノマトペの型にはめて作られた語も使われていた。

- ① それは當つていよ／＼むつとする事なり。 (「傾城禁短気」)  
 ② 父は始終黙然としてみたりしが (「夏祭浪花鑑」)  
 ③ 弥二郎もなるほど、おもつたところがつまり、ふさぎきつてだんまりでいる。  
 (「東海道中膝栗毛」)

例①は相手の気にさわって怒る様子を表しており、「むっと」は純然と沈黙を表すものでない。近世では例②③のように「もくねん」「だんまり」という語で沈黙の様子を表していたようである。『日葡辞書』には、「だんまり」「むっつり」の項はないが「もくねん」「もくもく」が併記されており、「例、Mocumocuto xite iru 何もしないで黙っている」と記載されている。しかし、調査対象とした作品に「黙々」の例は見られず、「黙然」のほうが一般に広く用いられていたのではないだろうか。

近世においてはまだ個人の沈黙を表す和語系のオノマトペは発達しておらず、漢語の「黙々」または「黙然」を使っていた。「だまる」の名詞形を変形させた「だんまり」も多く見られるが、これは他のオノマトペが主に副詞として使われるのに対して、名詞としての使用例しか見られない。「だんまり」という語形は「ほんやり」「のんびり」などの語形と共通し、特に「しんみり」「やんわり」など一般語彙との関連からオノマトペが作られる際に採られる語形の一つであるが、「だんまり」の場合はオノマトペに似せながらもオノマトペ化しなかった語なのではないだろうか。

## 3.2 近代の場合

近代になると「むっつり」の例も多く見られる。「むっつり」「だんまり」「黙然」「黙々」の例を以下に挙げる。

- ④ 父のような、陰気な、沈黙した者の手に育っては、必ず時勢に後れる (「片恋」)
- ⑤ 朝からウオトカを飲む頃までは沈鬱で、 (「片恋」)
- ⑥ 女房は気を打たれ、黙然で唯目を纏る。 (「歌行燈」)
- ⑦ 暫時 沈黙。 (「蒲団」)
- ⑧ 私は黙々として熱烈な言葉の前に坐りました。 (「行人」)
- ⑨ 「うん」と碌さんは答えたぎり黙然としている。 (「二百十日」)
- ⑩ しかし杜子春は老人の言葉通り、黙然と口を噤んでいました。 (「杜子春」)
- ⑪ 細君はむっつりと下を向いている裕佐の方にこう云って (「青銅の基督」)
- ⑫ 弟は相変わずむっつりと、机の前に坐っていた。 (「学生時代」)
- ⑬ よこせ！ 卯平は暫く経ってからむっつりとして舌を鳴らしながらいった。 (「土」)
- ⑭ きょとりとしてまじまじ木村のむっつりとした顔を見やる様子は (「或る女」)

和語の「むっつり」「だんまり」には、明治期に漢語を当てた例が少数(「片恋」2例、「巡查」1例)見られた。沈黙した状態や気分を表すものとして使われていた。「だんまり」は調査範囲で10例しかみつからず、近代ではあまり一般的な語ではなかったと思われる。「むっつり」は明治中期頃まではあまり見られないが、明治後期から用例が多くなり大正期にかけて例⑫~⑬のように広く使われている。例⑫⑬は沈黙している様子を、⑭⑮は寡黙に加えて無愛想な表情を表している。一方、漢語の「黙々」「黙然」は明治期に多く用例が見られた。「黙々」は和語をふりがなにするこもなく使われ、「黙然」も例⑦のように「だんまり」を当てる例が少数(「歌行燈」に3例、「くされ縁」に1例)見られただけで、それ以外の多くの例が和語を当てずに「もくねん」という読みで用いられている。調査した範囲では明治期のほとんどの作品に「黙然」の例が見られ、「黙々」以上に一般的な語であったことが窺われる。『和英語林集成第三版』を見ると、「むつり」「むつと」「だんまり」「もくねん」「もくもく」の項がある。「むつと」は「憤然」とあり怒りを含む様子を表していたようである。「だんまり」は「だまり」の口語とあるだけで例はない。「もくもく」は「-ni fusuru」という例が挙げられていることから、黙って何かをする様子を表すときに用いられたようであるが、「黙々と」の形は挙げられていない。「むつり」は「sedate in manner, taciturn」と解説された後に「-shite iru hito」の例があり、性格や物腰を主に表していたことが窺える。「もくねん」は「-to shite oru」の例が挙げてあり、沈黙している様子を一般的に表したようである。「むっつり」と「黙然」は使い方を分けながら併存していたが、明治後期から大正にかけて、「むっつり」の用例が多く見られるのとは対照的に、「黙然」の用例は少なくなっていく。

「黙然」は漢語ではあるものの、「もくぜん」とふりがなされる例が少ない点、また和語のふりがながされずに用いられた点で、「肅然」「悄然」「慄然」など他の「-然」型の漢語系オノマトペとは異なる性格を持つ。「肅然」には「しっとり」、「悄然」には「しょんぼり」、「慄然」には「ぶるぶる」などの和語が当てて使われた例がある。これらの語に和語を当てない場合には「シュクゼン・ショウゼン・リツゼン」と読まれるが、「黙然」は「黙念」とも表記され、「-ネン」

という語形のオノマトペ的な感覚を持たれていたと思われる。他に「つくねん」「ぼつねん」という語もあり、これらは漢語由来のオノマトペとして和語系オノマトペと同様の感覚で使われていたのではないだろうか。「むっつり」が一般的に用いられるに従って「黙然」の用例は減少するが、漢語系オノマトペから和語系オノマトペで表現するように移り変わっていったのだろう。また、「黙然」が専ら沈黙した状態を表すのに対し、「むっつり」は先に見たように沈黙や寡黙な性質、無愛想な様子など、意味の幅も広がっている。漢語系オノマトペでは意味が限定され、和語系オノマトペでは意味が広がり、多義的になっていくことが窺われる例である。

#### 4. 和語系オノマトペと漢語系オノマトペ

日本語のオノマトペには和語系のもので漢語系のものである。漢語系のオノマトペには「りん(凜)と」「ゆうゆう(悠々)」「どうどう(堂々)」「さんさん(燦々)」「もうもう(濛々・朦々)」などがある。このうち「もうもう」は『現代擬音語擬態語用法辞典』に見出し語として立ててあり、「煙・湯気などがたちこめて視界を塞ぐ様子を表す」と解説されている。同辞典には「りん」と「ゆうゆう」「さんさん」の項はないが、「どうどう(堂々)」「らんらん(爛々)」「ぞくぞく(続々)」「りんりん(凜々)」などが各項目の「参考」の扱いで「漢語を起源とする」語として挙げられている。これらの語に対して「もうもう」は漢語由来の日本語のオノマトペとして認定されているようである。先に見た「しんしん」も同辞典の見出し項目になっており、「参考」として「漢語を起源とする語」に「津々」が挙げられていることから、「深々・沈々」から生まれた「しんしん」は、日本語のオノマトペとして定着していると考えてよいだろう。

もともと自然物や自然現象を表すオノマトペは、和語系のものより漢語系のものの方が多いのではないと思われる。「峨々」とそびえる山、「満々」たる大海、「滔々」と流れる川、「燦々」と輝く太陽などを和語系オノマトペで表現するのは難しい。「静寂」を表すオノマトペを見ても和語系の「ひっそり」が「人の気配」が関わっているのに対し、「しんと」は「しんしん」という自然界の静けさを表す漢語に由来しているものであった。「静寂」と対義である「騒音」のオノマトペを見ても、1節に挙げた語はすべて「人の声・ざわめき」が基になってできたオノマトペであり、同じ傾向を示している。漢語由来の「しんしん」は「もうもう」のように「人事」よりも「自然」に関わるオノマトペとして日本語のオノマトペに取り入れられていったのだろう。そこから派生したと思われる「しんと」も「ひっそり」と意味を分け合って、日本語のオノマトペとして残ったものと思われる。

「沈黙」を表すオノマトペの場合は、人間に関わる事柄であるためか、「むっつり」という和語系オノマトペが発達するにつれて、「黙然」という漢語系オノマトペの使用は衰退していく。「自然」に対して「人事」に関する事柄は和語系のオノマトペが用いられる傾向にあるのだろう。

本稿では静寂を表す「しんと」「しんしん」「ひっそり」、沈黙を表す「黙然」「むっつり」を中心に、和語系オノマトペと漢語系オノマトペが類義表現となっている場合にどのように関わりあっているのかを見てきた。明治30年代はオノマトペの使われ方から見ると、近世で使われた語と今後使われていく語とが大きく入れ替わる時期であると思われるが、「黙然」と「むっつり」の入れ替わりもほぼその時期に当たっている。一方では、漢語系オノマトペの中で「しんしん」「しんと」のように和語系に組み入れられながら使われ続けるものがある。日本語のオノ

マトペの成立及び史変遷を考える際には、和語系・漢語系それぞれのオノマトペの関わりから見ていくことも必要であろう。

### 【注】

- 1) 『国語学研究事典』「擬声語」「擬態語」の項 (p. 94).
- 2) 「擬音語擬態語とは何か」『現代擬音語擬態語用法辞典』(p. xi).
- 3) 『暮らしのことは 擬音語擬態語辞典』によると、「ひたひた ③物がどうにか浸るくらい液体がある様子」の場合は「動詞『浸る』を音が類似することにひかれて派生したものか」とあり、「うきうき」は「浮く」との関連が指摘され、「うねうね」は「『畝』からきた語」と解説されている。
- 4) 『暮らしのことは 擬音語擬態語辞典』には、「ねばる」はもともと「『ねばねば』の『ねば』を語根として派生したものであると書かれている。また『時代別国語大辞典 上代編』には、「ユラは擬声語である一方、ユラカス・ユラク・ユラメクなどの語幹でもある」とある。
- 5) 『日本国語大辞典』「しん」の項に挙げてある例で古いものは江戸時代の談義本の例である。また、国文学研究資料館の古典文学データベースで検索したところ、中世・近世の作品には「しんと」の用例はなかった。
- 6) 『暮らしのことは 擬音語擬態語辞典』「ひっそりかん」の項には、「『ひっそり』に同じ意味を表す漢字の『閑』をつけて、意味を強めたもの」とある。
- 7) ここで言う「音象徴」とは、「記号とする語音と記号化の対象となる種々の事象との間に」ある、ある種のつながり（『国語学大事典』「擬声語・擬態語」の項）のことを意味する。
- 8) ここで言う漢語系オノマトペとは、『擬音語・擬態語辞典』（角川書店）にある金田一春彦の「擬音語・擬態語概説」で解説されている漢語由来のものを指す。
- 9) 『明治文学全集』は「高橋阿伝夜叉譚」「巷説兒手柏」「蝶鳥紫山裾模様」「浅尾よし江の履歴」「巷説二葉松」「情海波瀾」「西の洋血潮の暴風」「怪談牡丹灯籠」「白玉蘭」「花柳春話」「薄命のすず子」「龍動鬼談」「経国美談」「濱子」「小公子」「罪と罰」「くれの廿八日」「黒潮」「雲のゆくへ」「新任知事」「新所帯」「開業醫」から、『筑摩現代文学大系』は「運命論者」「女難」から用例を採った。  
 なお、検索語は、古典文学データベースの場合は「ひっそ／ひそ／密／閑／しん／森／深／寂／沈／静／黙／だんまり／むつつり／もくねん／もく（本文がカタカナ表記のものはカタカナで入力）」、『明治の文豪』『大正の文豪』の場合は「しんと／しいん／しーん／シン／シーン／しんしん／シンシン／森／寂／深／沈／静／蕭／肅／閑／靜／ひそ／ひっそ／ヒソ／ヒッソ／密／黙／だんまり／ダンマリ／もくねん／モクネン／むつつり／ムツツリ／むっ」である。
- 10) 注9の検索項目にも示したように、「しんと」には「しーんと」「しいんと」という強調形も含める。
- 11) 土井忠生他編『邦訳日葡辞書』（岩波書店）による。
- 12) 『暮らしのことは 擬音語擬態語辞典』「ひっそり」の項による。
- 13) 『漢語林』（大修館書店）による。
- 14) 『現代擬音語擬態語用法辞典』「ひっそり」の項による。

## 【参考文献】

- 芋阪直行 1999 『感性のことばを研究する 擬音語・擬態語に読む心のありか』新曜社。
- 金田一春彦 1978 「擬音語・擬態語概説」(浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』所収)角川書店。
- 国語学会編 1980 『国語学大事典』東京堂出版。
- 佐藤喜代治編 1996 『国語学研究事典』明治書院。
- 上代語辞典編集委員会 1999 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂。
- J. C. ヘボン『和英語林集成 第三版』復刻版 1974 松村明編 講談社。
- 田守育啓, ローレンス・スコウラップ 1999 『オノマトペー形態と意味一』くろしお出版。
- 土井忠生他編 1980 『邦訳日葡辞書』岩波書店。
- 飛田良文・浅田秀子 2002 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版。
- 堀井令以知 1986 「擬音語・擬態語の言語学」『日本語学』5巻7号。
- 山口仲美編 2003 『暮らしのことば 擬音語擬態語辞典』講談社。

# Onomatopoeias of Quietness and of Silence

— Relation between Onomatopoeias of Japanese Origin and  
Those of Chinese Origin —

Michiko NAKAZATO\*

## ABSTRACT

I studied the relation between onomatopoeias of Japanese origin and those of Chinese origin by the examination of the onomatopoeias of *Shinto*, *Shinshin* and *Hissori* expressing quietness, and those of *Muttsuri* and *Mokunen* expressing silence.

First I showed origins of each onomatopoeia discussed in this paper. This is the important examination because there is contradiction quietness and silence mean soundless conditions but onomatopoeia in itself is the sound symbolism. I showed following four points; *Shinshin* and *Shinto* derive from onomatopoeias of Chinese origin; *Hissori* derives from other Japanese words like *Hisoka* and *Hisomu*; *Muttsuri* is a mimetic word; *Mokunen* is an onomatopoeia of Chinese origin.

Secondly I examined the coexistence and the change in the onomatopoeias of quietness and those of silence based on many examples seen in Edo, Meiji and Taisyo period. *Shinshin* limited the meaning. *Shinto* and *Hissori* have coexisted *Shinto* focused on soundless condition while *Hissori* focused on emptiness. *Mokunen* replaced with *Muttsuri* which expresses sedateness in manner besides silence in the middle Meiji period.

I showed onomatopoeias of Chinese origin have two patterns through the detailed research. One is treated as Japanese onomatopoeia and the other is just a Japanese word of Chinese origin.

---

\* Division of Language Department of Japanese Language